

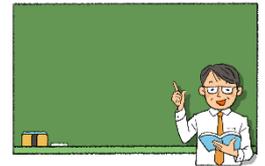
「まず考える、つぎに語り合う(子どもの主体性)」について

御自身が学校に通っていたころのことを思い出してください。

授業中に、先生がひたすら話している授業を受けたことは数多くあると思います。

また、先生が発した問題(学校現場では「発問」と言っています)に、数名のリアクションの速い子が答え、「はい、そのとおりです。」「では次の問題です。」と40人程いる学級で実質数名だけで授業が進んでいた経験をされた方もまた多いのではないのでしょうか。

話し方がとてもうまいとか、内容に興味があって聞きたい、または一部のやり取りだけ聞いていておもしろい場合もあったでしょうが、学級に集っている子どもたちすべてにとっての「学び」にはほど遠かったと言えるでしょう。



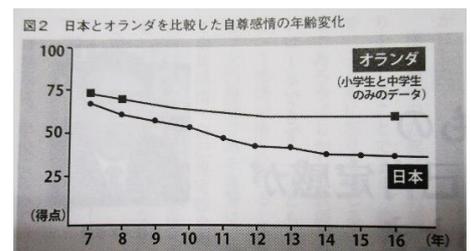
今日本の教育は、全ての子どもたちが考えたいと思うような発問を教師が練りに練った上で準備し、一人一人が自分なりの考えをもつ時間を確保する。考えがなかなか進まない子には、過去の学習で関連する内容を思い出させたり、物や図

などを使ってひらめきを助けたりする等を行います。「まず考える(自分なりに必死になって考えをもつ)」場をつくっています。その後、自分の考えをここでも必死になって自分の言葉で語り、ペアとして、グループとして、または学級全体として、様々な考え(間違っただけも含む)を受け止め、よりよい考えに集約していく場をつくっています。教えられた(教え込まされた)のではない、自分たちの力で考えを磨き上げる経験です。



気になる研究があります。日本の子どもの自尊感情・自己肯定感の現状が世界と比べて低いことを、小児科医で青山学院大学教授の古荘純一先生が明らかにしました。幸福度が高い国とされるオランダの子どもと日本の子どもの自尊感情を比較したグラフです。

見てお分かりのとおり、日本の子どもたちは年齢が上がるにつれて数値は下がっています。「自分のよさを肯定的に認める」ことができなくなっているのです。先生は、「日本の子どもたちは、主体的な体験が乏しく、受動的な体験の連続であるため、自分の体験を肯定的にとらえにくい」と推測しています。そして、主体的(能動的)な体験を、学校や家庭の教育の中になるべくたくさん取り入れることを提案されています。



古荘純一 「教職研修2021.8」より

川原小の教職員は、「自分ごととして」、「自分なりに」、「自分の言葉で」、「自分たちの力で」等々、学級の全ての子どもたちの主体的な態度を引き出す授業を展開しています。目の前の事象に対して、素直に真摯に取り組む川原小の子どもたちは、主体性がぐんぐん伸びていると思っています。この呼応関係がますます高まるよう努めていきます。

嬉しいお知らせがあります。3年生以上が取り組む学力調査の結果が出そろいました。5年生、6年生は国語、算数とも、3年生、4年生は国語が長崎市の平均を上回りました。子どもたちが主体的に学ぶ授業の充実が表れてきたと考えています。